

肺炎と結核

寒冒と最も密接な関係ある病氣としては、言う迄もなく肺炎と結核であろう。特に現在日本に於いて、最も悩みとされているものは之であるから、充分解説する必要がある。抑々肺炎と結核という病氣の初因は、勿論寒冒からである。というのは前項に述べた如く、折角寒冒という浄化作用が発生するや、医療は極力停止させようとして、種々の手段を行う。之も既に述べた通りであるが、其中の最も不可であるのは、薬剤と氷冷である。元来薬剤とは如何なるものであるかというところと悉く毒物である。にも拘わらず何

故毒物を薬剤として用いるようになったかという、今迄に説いた如く、浄化作用停止に最も効果があるからである。

茲で、浄化作用なるものの本質を説いてみるが、曩に述べた如く、体内の毒素を排除すべく、生れながらに保有している自然良能力である。従つて此力の強弱によつて、浄化力にも強弱が出来る。何よりも結核が青少年に多いという事は、浄化力が旺盛であるからで、壮年から老年に及ぶに随い、減少するのも其理由であり、又各種の伝染病が、青少年や小児に多いのも同様の理である。そこで病氣即ち

浄化発生の場合、医学は浄化を極力止めようとする、それには何よりも体力を弱らせる事である。其唯一の方法として考へられたのが、毒物を体内に入れる事で、それによつて体力が弱るから、浄化も弱り、病氣症状も軽減するといふ訳である。

又氷冷は何故不可かという、毒素を溶解すべき熱を冷すから浄化が弱り、元通り固まり、それだけ苦痛も減る事となる。勿論、湿布も同様であつて、只些か異う点は、人体は不断に皮膚の毛細管からも呼吸しているのでそれを窒息させるから、其部の浄化は停止し、症状は緩和されるの

である。特に近来注射が流行するが、之も毒分の強い薬は、服んでは中毒の危険があるから、皮膚から注入するのである。

寒冒に罹った場合、右の如く薬毒や其他の方法で、浄化停止を行う以上、保有毒素の幾分は減るが、大部分は残存し、再び固まってうと共に、新しい薬毒も追加されるので、寒冒に罹る毎に毒素は累加し、或程度に達するや、一時に浄化活動が起る。それが彼の肺炎で前項に説いた借金 の理である。何よりも肺炎の特異性は、喀痰が肺臓内に多量に溜る事で、其為喘音が甚だしいのである。喘音とは呼

吸の度に肺胞が動くにつれての喀痰の響きである。又呼吸困難は喀痰多量の為、肺臓内の容積が縮小するから必要量の空気を吸うには、頻繁に呼吸しなければならないからである。此理によって肺炎の場合、何等の療法もせず、自然にしておけば痰は出るだけ出て順調に治るのである。処が医療は凡ゆる手段によって浄化を停止させようとする。何よりも肺炎に対しては医療は特に強い薬を用いる。それは毒が強いからで、浄化停止に強力だからである。そんな訳で強い浄化と強い浄化停止とで、猛烈な摩擦が生じ、非常に苦痛が伴う。其為食欲減退、高熱による体力消耗等と相

俟って、衰弱死に到るのであるから、医学の誤謬たるや言うべき言葉を知らないのである。

右の如く肺炎は強烈な浄化である事は体力が旺盛であるからで、体力の弱ってる人は浄化が緩慢に発る、それが結核である。そうして医師が初めての患者を診断する場合、種々な方法の中、今日最も決定的とされているものはレントゲン写真である。之は肺臓内の雲翳又は空洞が写るからで、之をみて結核と断定するが、医学は之は何が原因であるかを知らない。そこで其原因をかいいてみるが、寒冒の説明にもある通り、最初液体となった毒素が、一旦肺臓内に

侵入停滯した時、極力浄化停止を行う結果、喀痰は排泄されず、肺臓内に残存して、日を経るに従って固結となる。それが雲翳であつてみれば、之は全く人為的所産と言えよう。故に最初の液体侵入の際は、肺臓は何等異状はないのである。そうして固痰の位置が比較的上部の場合は、肺炎カタル又は肺門淋巴腺というのである。それと似たものに肺浸潤がある。之は輕微な肋膜炎又は肋骨附近に溜結せる毒素が浄化溶解し肺臓内に浸潤吐痰とならうとするので、此場合も医療は固めようとするから容易に治らないので、何れも放任しておけば、順調に治癒するのである。

そうして一度結核と断定するや、寒冒と同様医療は極力
浄化停止を行うが、それに最も効果ありとされているの
が、近来熱心に推奨されている彼の安静法である。処が此
安静法が曲物である。何となれば仮に健康者が一ヶ月も安
静にすれば、運動不足で食欲は減退し、体力は減り、外出
しない為顔色は悪くなり、目に見えて衰弱し、一寸動いて
も息切れをするようになるので、言はんや病人に於いてお
やである。尚其上薬毒を入れられ栄養と称して動物性蛋白
を多く摂らせるが、右は悉く衰弱を増させる方法であるか
ら、結核患者ならずとも衰弱するに決っている。

此様に衰弱法を行ふ結果、予期通り浄化力は極度に減退し、症状は減り遂に無熱となり咳も吐痰も無くなるので、之で恢復したと思つて喜ぶが、何ぞ知らん実は浄化以前の狀態に還元させたままで、而も反つて藥毒は増し、体力は弱り、消極的小康を得た迄で、眞に治つたのではないから、何かの機会に触れるや、俄然惡化し重態に陥り、遂に死に至る事が往々ある。斯ういう経路は医家もよく経験する処であらう。故に医学では決して治るとは言はない。固めるといふにみても明かである。又経過中に患者が偶々少し運動でもすると直に発熱する。すると医師は周章てて戒

めるが、之は運動によって鎮静していた浄化が頭を擡げるからで、本当はいいのである。よく長い間掛けて漸く治つたと曰はれ、ヤレ安心と普通の生活を始めるや、間もなく再発元の木阿弥となる事もよくあるが、之等も何年掛りで漸く固めた毒素が、俄かに溶け始めた為である。以上によって明かな如く、今日の医療が如何に誤っているかで、忌憚なく言えば医療が結核を増やしていると言っても過言ではなからう。

茲で、結核菌に就いて大いに注意したい事がある。医学では結核菌は、伝染するとして恐れるが、それもない事は

ないが、大部分は自然発生である。前述の如く最初喀痰が肺臓内に侵入するや、医療は固めて出なくするので時日の経過につれて腐敗し、微生物が発生する。之が結核菌である。そうなった痰は悪臭があり、粘着力が強いものである。考へてもみるがいい。如何なる物質でも古くなれば腐敗する、腐敗すれば微生物が湧くのは物質の原則である。ましてや体温という好条件も手伝うからである。之によつてみても最初の寒冒時、肺臓内に喀痰が滞溜した時、極力出して了解ばそれで済んで了う。それを一生懸命出さないようにして腐敗させ、菌迄湧かせ、菌の蚕食によって空洞

さへ作るのであるから、結果から言えば善意の加害的行為とも言えるであろう。此理に目醒めない限り、今後如何に多くの犠牲者が出るか測り知れないものがあるだろう。